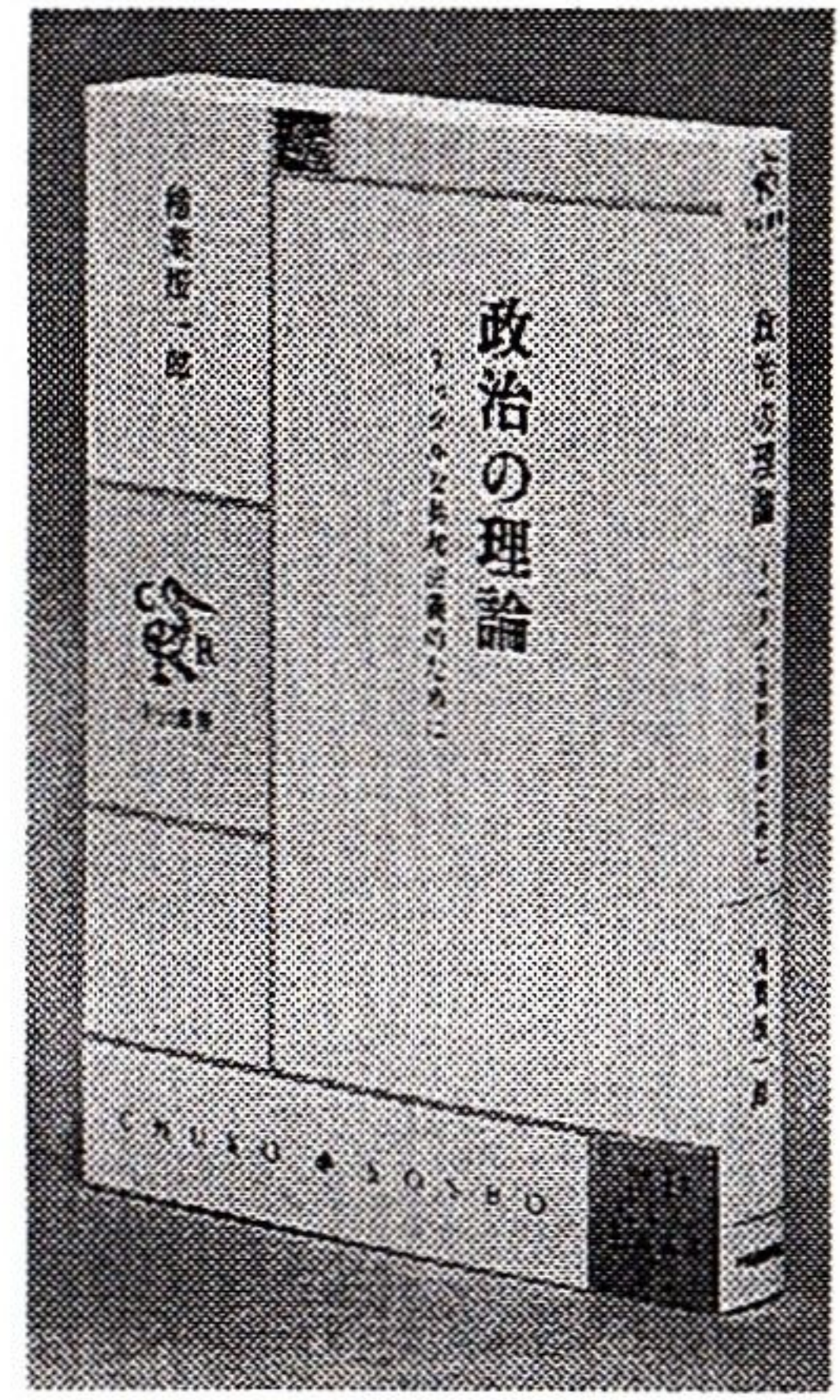


# 政治の理論

稲葉振一郎著



(中央公論新社・1836円)

グローバル化が猛威を振るうなか格差と貧困が拡大し、

それによって健全なデモクラシーを形づくってきた社会的基盤が蝕<sup>むしば</sup>まれていく。政治への平等な参加を促すためには国民一人一人の最低限度の生活が保障されなければならぬ。それは、いかにして資本主義の論理とデモクラシーの論理の折り合いをつけていくのかという問いでもある。

この古くて新しい問いに果敢に挑戦したのが本書である。万人に開かれた公共圏を維持するためには、経済的な不平等や格差を是正しながら各人が政治に参加できる環境が必要である。その基盤づくりが著者の考える「政治の理論」である。著者はハンナ・アレントとミシェル・フーコーに着目する。アレントにおける「政治」とは自由な市民による対立・競争・交渉などを通じた合意形成である。この「政治」が存立するためには市民生活の質の確保が欠かせない。そこで個々人の私的領域にまで入り込み、生活全般を規定するフーコー的な

「統治」が要請される。個人<sup>ト</sup>の生存を保障するだけではなく、所得や財産を確保し、それらを十分に活用できるような資質を育成するのである。リベリズムとは市民生活を保障するための理念であり、そのための統治機構を必要とする。

つまり、万人が平等に扱われる「政治」を成り立たせるためには、万人の生活を保障する「統治」が不可欠なのである。政治参加の機会と権利を与えるだけでなく、それらを十分に活用しうる財産と資質を保障・育成するのが「リベラルな共和主義」である。本書では、「政治」を支える基盤としての「市民社会」、それを維持するための「政策」、「政策」の基盤としての「政治」という循環的な構造が構想されている。

この構想は、「デモクラシーの経済理論」と言えるのかもしれない。形式的な参政権の平等のみならず、他者によって支配されることのない判断力とそれを支える資産を各人が備えなければならぬ。それこそが政治の前提であり、健全なデモクラシーには不可欠な社会基盤なのである。(九州大准教授 大賀哲)

いなば・しんいちろう

明治学院大教授。著書に『不平等との闘い』など